

心身症的傾向をもつ子へのアプローチ

— 母親との面接をとおして —

椿 ミドリ*

心因性咳嗽発作を発症し、この症状が消退した後にも下校中に加療中の病院前路上で、めまいを起して倒れたり、便秘に苦しんだりした児童とその母親に対し養護教諭としての立場からふれあいをもった記録である。本児の身体症状は消退し、直接的なかかわりは一応終結したが母親自身に不安があること、さらに弟の夜尿治療の申し出があったことから母親との面接を継続したが母親自身の自己確立のきざしがみえたのでかかわりを終えた。

I 研究の目的

1400余名の当校では保健室に毎時間来訪者が絶えず、不定愁訴のような症状で毎日のように顔をみせる子もよくある。このような子どもたちをどう養護すれば、このひとりひとりにとって最上なのか。子どもたちの心身の健康を期待し、この事例を通してとりくんでみた。

II 児童の状況

1. 対象 Y 小6女子

2. 問題の概要

(1) 家庭の状況と生育歴

- 父(39)会社員。胃潰瘍で入院2回(最近では4月～5月)。家族に対して消極的であり、父親としての座が低い。仕事もよく休んだが現在は残業もするようになった。
- 母(34)会社員。小柄であり常にからだの不調を訴える。夫に対する不満や、健康上の不安を持つが病弱を理由に期待していない面もある。姑にも不満を持つが、なかばあきらめているようである。
- 弟(小5)夜尿・つめかみあり。 ◦妹(小4)明朗、勝気。
- 祖母(70)健康で60才まで勤めに出て一家の経済を支え、現在も内職に励み、家の新築は自らの力によるものと自負し、現在もやりくり一切をする。父母を軽視する傾向がみられる。本児を溺愛する。
- 本児(Y)出生時体重2500g・混合栄養・生後2週目にヘルニアで入院・11か月で肺炎・1才半で消化不良のため入院・3才で肺炎のため入院・5才でヘルニア手術のため入院という乳幼児期を過ごし、祖母と母親が健康面に細心の注意を向けてきた。3才まで母が養育し、その後、母親が勤めに出て、

* 加茂市立加茂小学校

祖母が主に養育に当たった。父母は祖母に気をつかい子どもたちに対して、きびしさを欠く。祖母・父・母の関係から緊張感・不安感のある日常の中で成長したものと思われる。母親を無視するような態度が時にみられる。親子関係診断テスト(○年5月実施)によると父母の養育態度は、危険地帯に消極拒否・盲従・溺愛が、準危険地帯に干渉がみられ、子どもからみた父母にも拒否傾向・保護傾向がみられる。

(2) 本児をめぐる状況

ア 知能・学力及び行動(要録より抜すい)

知能偏差値 45, 学力偏差値 理科 55・社会 54(教研式 6年生)。

学習意欲は充分あるのだが、わからないところにぶつかると中途半端で投げだしてしまうものが多く図工は未完成に終わったものがしばしばあった。口数は少なくおとなしいので、ふだんはどちらかといううと目立たない方であるが、その中にも他人に認められたいという欲求がみられる。

イ 健康

欠席は4年までは少なかったが5年になり咳嗽発作・かぜで59日あった。小柄で胸がうすく、きゃしゃで、まだ少女らしくないからだつきである。まだ初潮をみない。

ウ 学級でのようす(学級担任の観察)

友人関係では、家が近い女子3人と仲良く、座席がえをする際の調査では排斥されず選択もされていない。自ら働きかけるといふより仲良し3人にさそわれ、めんどろをみられているようである。ノートをする際、その時により字の大きさが非常にむらがある。担任が机間巡視をする際に脇を通るとからだ全体に緊張感がみられ、給食時Yのグループで食事をする場合にも同様である。与えられた仕事はきちんとやらし宿題も忘れない。

エ 性格

バウムテスト¹⁾(○年1月)では、下半分に描かれ、筆圧が弱く無力感・ひっこみ思案意欲欠如・自我欲求の抑制があるようであり、樹枝からは自己統制の欠如がうかがわれ、問題傾向として不安感・疲労しやすい傾向があると考えられる。本児は入学時より絵画に抵抗感を示し、未完成の作品が多く、抑制傾向がみられた。



(図1)

(3) 発症経過及び本児とのであい

○年11月8日(月) 理由不明の欠席があり、翌2日間「かぜ」、その後「喘息」に変わった。これまでに喘息発作の既往はなく不審に思い出席を待つうち、21日(日)の夜、激しい発作のためかかりつけの県立病院へ入院し、12月6日までの16日入院生活をした。担任が2回見舞ったが、ちょうど咳がでて苦しうだったこと、友だちが数回見舞った際にも「Yさんは、わたしたちがいくといつも咳がでてなんぎそうだ」と担任に報告したことを知った。

○年1月8日(土) 始業式直前、教室で咳嗽発作が始まり仲良しの1人に背負われ、他の2人と保健室に来た。起座位で安静にさせ様子をみたが喘息はなく「咳ばらい」のような咳が息つく間もなくあり、粘張な痰でなく「つば」を出し続けた。喘息発作とはちがうようであるが入院した事実があるので、担任に家庭連絡を依頼して経過をみるうち、祖母来室後5分ほどで発作は消退し、その後30分休養して教室へもどり清掃をすませて帰宅した。以上のような容態から心身症的傾向があるように感じられた。

Ⅲ ふれあい

1. 方針

- (1) 主治医他関係者より医学的診断結果を得て器質性疾患が否定された上で、かかわる方向を定める。
- (2) 受容関係を成立させる（家庭内に於ける人間関係の不安定さ・「3人とし子」の長女である本児の立場から依存欲求が満たされないうえ、肺炎の既往がありかぜをひきやすく「気管の弱い子」として成長し、発現された症状が咳嗽発作という心身症であるものとし、発作時及び来室時の手厚い養護により養護教諭との依存関係を育てる。²⁾）
- (3) 校内で本児をとりまく人間関係の調整に努める（本児に対して共通理解を持つよう働きかける一方学級内では、めんどうをみられるだけの存在でなく自ら働きかけ承認される機会をつくり、はりあいのある学校生活が過せるよう学級担任に願います。³⁾）
- (4) 家庭内の人間関係安定のため母親に対して面接の機会を持つ。

2. 経過の概要

(1) 本児とのかかわり

○〇年1月8日 始業式

学校での発作は初めて。担任の家庭連絡により祖母が来室し発作がおさまリ休養後に本児に対し、発作時には担任にお願いしてから、なるべくがんばって保健委員と歩いて来室するよう話す。以下は祖母が話した内容であるが本児に対する祖母の気持ちが表出されている。

- ・学校にあがるまえ弱くて何度も入院し、気管が弱く育てるのに自分がどんなに苦労したことか。
- ・今朝登校前、「体育館に坐るのでせきがでるかも知れない」と言うので座布団を持って出るようすすめたが「めんどうくさいからやだ」と言って出たので電話がなったとき「やっぱり」と思った。
- ・家でも夜8時ころ皆でテレビをみているころになるとせきがではじめる。病院でも8時ころだった。日中は他の病室をよく訪問して遊んでいた。ねる時に安定剤が出され今ものませている。
- ・入院中、夜も便所へ行かせるよう指示されたが寒くて可愛そうなので便器を使わせとおした。また付添っている必要がないと言われたが「なんきそうでかまわんでおくことなんかできるもんじゃない、と看護婦に言ってやった。」と病院の処遇に対し不満を表わした。

○1月13日 学級担任に依頼し呼び出し相談。

- ・10月にかぜをひいたのが元で悪くなった。もともと気管が弱いからだ。1月9日（日）の夜8時ころせきが1時間続いた。病院で教えてもらった腹式呼吸をしたらよかった。
 - ・入院中は退屈どころか「行」があった。今も家で祖母が用意してくれる「行」があって忙しい…服薬5回と安定剤・吸入朝夕2回・のみものと栄養剤で6種類…と大変そうにゼスチャーをまじえて言う。
 - ・なぜかわたしと弟はおとうさん似で、妹だあけがおかあさん似なんだなあと、それまでは元気よく話していたのに、急に小さな声で、妹が母親似であることを強調した。本児のさびしきとして受けとめた。
- バウムテスト実施。「どんな木かけばいいかわからないな」と言いながら筆が進まず、10分後「もうこれでいいわ」と鉛筆をおく。19日の学習参観日に、なるべく母親から来てもらうようすすめる。

○1月18日 主治医を訪問し 所見をきき症状について確認。

・一種のヒステリー症状であり、入院中廊下を通り目があうと咳込み、外来受診の際にも同様だった。両親は病院側の指示をよく理解できないような人であり、祖母がいまだに力を持っているのもそうしたせいであろう。祖母の気持ちを改善するために指導し院長が吉田養護学校一時入学を勧めたところノイローゼぎみになり手をやいたとのこと。今後、主治医と連絡をとりながら、かかわっていくことにする。

○ 1月22日 清掃開始直後、咳嗽発作で背負われて来室。

ストーブ脇に用意した椅子まで手をそえて歩かせ、してほしいことがあったら遠慮なく言うよう話し全身のパスを行いリラックスさせた。約25分で症状が消失し昨日病後初めてした体育・クラブ活動の様子をきかせてくれたが、クラブの時、試合の番がこなかったことに不満も表わしていた。

○ 2月8日 別の用で来室。

2月4日、友だちと下校途中めまいがして県立病院前路上で倒れ、病院職員が小児科外来へ抱いて行ってくれ診察を受けた(血圧・血液検査異常なし。)祖母と母が迎えに来てくれた。夕方7時からそろばんへ行ってきたが大丈夫であった。スキー学校には2回とも行けなかった。安定剤服用を1月末で自分からやめた。最近便秘きみだ。

経過報告をするように、すらすらと笑顔で話し、表面的には楽しさすら感じられ、自己顕示傾向があるように思われたので、本児の現在の気持ちを充分受け入れるべく話を聞いた。その後、学級が流感のピークに当たり本児も一週間欠席したが以後3月末まで無欠席で、その間数回来室し咳がでなくなったことをきかせてくれた一方、父親の健康状態のこと・そろばん三級に合格したこと・道場での当番がめんどろうでいやなこと・母親は会社が忙しく学校に来てくれないこと等、不満も訴えた。

○ 3月22日 1限の卒業式練習後、下腹部痛を訴え来室。

寒さ・便秘のためだと、肩を縮めて下腹部をおさえる。ストーブ脇で暖をとりながら話すと修学旅行のことをしきりに問う。欠席カードを持参する児童が数人あったが、笑顔で話をしている本児はそのたびに下腹部をおし顔をしかめた。1週間便通がなく受診して浣腸、その後あっても少量で常に腹痛があると訴えた。45分休養し教室へもどる。食事にむらが見られること・2か月後の修学旅行に不安を持っているようなので、食餌指導・修学旅行の内容について話した。

○ 4月～5月 便秘に対する苦痛を訴えることがあったが修学旅行には元気で参加。(父入院)

○ 6月 2回呼び出し相談、1回自主来談。安定してきたがまだ緊張感がみられる。

そろばんが思うように進まないが二級に挑戦していると意欲的である。20日下校時来室し「あの、わって(私)少しづつだけど毎日できるようになりました」と、からだを軽く左右に向けながら甘えた声で話し、まだ緊張感は十分にみられた。6月末より学年の体力づくり(朝夕の自主トレーニング)に参加する。

○ 7月 期末に呼び出し相談1回。終結を申し出る。

夏季学校参加を楽しみにしている。「わって(私)、もうこなくていいみたい」と言う。態度に緊張感がまだみられるし、学級では交友関係もまだ狭く、担任を意識するような態度もみられるが、一応本児に対する直接的なかわりは終結する。

(2) 母親との面接経過

母親自身の自己確立により本児への目のむけかたの変容を願った。「日給月給」という勤務であること・本児に対して消極的な面があること・夫の発病等により始めは面接の機会がとれなかった。

○ 1月19日 参観日。第1回面接(本児と妹もついて来た)。本児に対して消極的。

Q₁ : どうだった, 内科ではスキーにのっていいっていったんだ?

Y₁ : うん。

T₁ : これからスキーの練習もできる。スキーにのっていいっていわれた。

Y₂ : うんうん, そういうわけ。

G₂ : スキー学校にもこうなんとかやりたいです。

T₂ : 是非やりたい。

G₃ : はい, Yもいきたがっていますんだね。↑

T₃ : はあはあ, Yさんもいきたがっているから

Y₃ : わって, 金曜に体育やろうかな。7時間自クラブもいってみるわ。

Q₄ : 体育をやるんだったら, そんげん急に無理しんで, クラブは休んだ方がいいこてね。

Y₄ : いやいややる, そんげん。

T₄ : Yさんは やってみようと思っている。

Y₅ : はあ, まあね。

(妹を促して席を立ていく)

本児に対して消極的な言動がみられ, 発症以来現在も祖母と一緒に寝て, すべて世話していることに對してあきらめているような, まかせきっているような気持ちを「わたしなんか, しんでも(しなくても)なんでもしてくれるんです, おばあさんが」という言葉で表出している。姉妹には, 弟も含めて母の手助けになる事を相談してみる・母親には, 咳に対して過敏にならぬよう努力し, 苦痛を訴えた時点で手厚くしてあげるよう3人(父・祖母)で共通理解する・夜は自らが世話をすることを提案すると「なんとかやってみます」と。

○ 3月 第2回(学級懇談日), 時間がなく経過報告し, 過労を訴える。

寝室のとなり(弟の部屋)に本児をうつした・咳がおちつき欠席しなくなった。過労を訴える。

○ 4月 路上でであう。

「今度は便秘が始まりました。あんたさんに相談にいきたいんですけども」。訪問の時間を昼休みに希望する。しかし, その後みえず。(夫が発病し入院)

○ 5月 第3回(昼休み), 修学旅行参加についての不安。

便秘が続いており, 数日前から軽いかぜをひいているため1泊旅行に出せるだろうか不安。健康面の不安として訴えているが 自分自身にとっても初体験である本児を離すことの不安に気づいていない。

夫の2回目の入院に打ちのめされていることがうかがえる。(5月25日に夫は退院した)

○ 6月 母親から手紙がきた(夫の退院から約1か月後)安定感がみられる。

夫が退院し勤めにではじめたし, 弟の皮膚・眼疾治療も完了, 自分は眼球外傷で通院したがようやく治ったので, 昼休みを利用して訪問したいとのこと。次週の約束をする。

○ 6月下旬~7月中旬 第4回~第7回, (昼休みに40分間)

祖母が家計一切をとりしきり, 子どもたちが学校に持ってくる金も, 小遣いも自分から与えることができない。自分の小遣いも祖母から手渡され, 小額である。夫からも子どもたちの勉強や寝の面もめんどうみてもらいたいし, たまには祖母に対して, 夫としての意見を言ってほしい。月給日に袋を持ってこのままどこかへ行こうと考えたことが何回もあったが子どものためにがまんした。最近, 祖母はとしのせいか気弱なところがみえる「もう少しのしんぼうだと思います」。夫が休みに子どもを魚つりにつれていってくれた。夫は自分のことを少しは考えていてくれるようだ, けんかをしたときにわかった。また生活保護を受けなくてはならないかと心配だったが, 夫も残業できるまでに回復した。

姑に対する不満・夫の健康上の不安と日常生活の中での不満を表わしていたが, 次第に自分のおかれている立場を客観視しはじめる。

○ 7月22日 第8回(個別懇談日)。弟の夜尿治療を申し出る。(本児は自ら終結を申し出ている。)

本児の便秘がなおり運動したりしているのをみるとうれしいと言う一方, 弟が数回 盗みを働いてし

まったこと・幼児期からの夜尿が続いていることの不安を訴え、夜尿の催眠治療を申し出てきた。

依存関係が生ずる事も考えられたが、弟の治療を通して母親との面接を継続することにより、自己洞察ができ、更に安定した養育態度がとれるようになることを願い夜尿の治療をすることにした。

○7月下旬～9月 第9回～第17回(勤めの帰りに30分間)

夏休みに夫が子どもをつれて旅行したとよこぶ。夫の回復・本児と弟の症状消退もあり安定してきたようにみえたが、9月中旬になり、肌寒さを感じると本児が、またいつ咳をしはじめるんではないかと心配し不安感を訴える。

○10月上旬 第17回

本児に食欲がでてきて、びっくりしている。まえ(胸)がふくらんできたし、背が高くなって急におとなげになってきた。遠足のあとも陸上大会のあとも少しも疲れた様子がなかった。もう心配しないことにした。心配するとかえって子どもにわるいから。さきのことさきのことと考え心配していても、なんにもならない。その日をしっかりとやればなんとかなると思う。展覧会に出品するクラブの作品づくりのため一箱に材料をみだててきた、夜になると妹と一生懸命やっている、町で同じものをひとりがもっているのを見たがあんなふうにはきれいにできなくてやりたい。夫も食欲がでてきたので体の方は心配ないと思う。祖母はもう毛糸を着ている、やっぱりとしをとったんだなあと思う。子どもたちに家の中の仕事を分担して、必ず最後まで責任を持ってするようにさせた。

本児やほかの家族に対しての気持ちに安定感がみられ、子どもたちの躰についても積極的になり、足が地についたという感じがする。この日は初めて薄く化粧をして来室した。面接を終結する。

Ⅳ おわりに

であいから10か月間のふれあいの中で本児の症状は一応消退したが、直接的なふれあいによるものというより、本児の母親の変容と家庭内の諸条件が好ましい方向にむかいつつあるからだと思う。担任の目を通した学級での存在は以前とくらべて、それほど変わったとはいえないが「最近、Yさんのことがあまり気にならなくなった。」と感想を述べた。弟の担任が来室し「あの母親、2～3日前に会ったら明るくなって、いつからこんなになったんだろうか。自分の方から話しかけてきた。言葉をえらんんだり、いいわけしたり、こっちの顔色をうかがったりしないで。」と話した。

卒業までの半年たらずの間に、現在の学級集団の中で対人関係に自信を持ち、自己が発揮できるようになって中学校へ進んでほしい。養護教諭としての立場でかかわってきたが「学級の中の児童」に直接かかわることができない。その子をうけ入れる学級づくりに心をくだいてくれた学級担任に感謝する。

たえずある来訪者(子ども)たちのささいなことのように見える訴えを心の耳でききとり、ひとりひとりがまた集団の中へ生き生きとかえっていけるよう努めたい。

(「教育相談」とのであいと研修の機会を与えてくださったかたがたに心から感謝いたします。)

参考文献

- 1) C・コッホ：バウムテスト 日本文化科学社。親子関係診断テストの手引き 日本文化科学社
- 2) 山形大学教授 杉浦守邦：心因性疾患 雑誌健康教室
- 3) 多湖輝他：催眠誘導の技法 誠信書房。成瀬悟策：催眠面接法 誠信書房